



## 現在・過去・未来

富山県小学校長会

会長 豊田 高久

9月初旬に、「こんにちは母さん」という映画を観ました。この数日前に主演の吉永小百合さんがテレビのインタビューで、息子役である大泉洋さんの幼い頃の写真を取り寄せたという話を聴いて、映画を観てみたいと思ったのです。吉永さんは、写真を通して大泉さんの過去を少しでも知ることで、息子とともに人生を歩んできた母親役を演じたいと考えられたそうです。

映画を観ながら、学級担任をしていた頃に先輩から言われた言葉を思い出しました。それは、「目の前の子供だけではなく、生まれてから今日までの成長、そして、そこにまつわる家族の思いなどを想像しながら、さらには、子供の未来の姿を想像することで、今やるべきことが見えてくる」というものでした。学級担任には、現在を見るだけでなく、子供の過去や未来を想像する力が求められるのだと、やりがいを感じるとともに、仕事の奥深さに身の引き締まる思いがしました。

映画のワンシーンに吉永さんが取り寄せた写真が登場し、それを見ながら会話する吉永さんと大泉さんは、本当の親子のように見えました。この二人にはともに歩んだ過去と現在があるばかりでなく、これからもともに生きる未来があるようにさえ感じられました。

ところで、吉永さんはインタビューで次のようなことも話しておられました。「自分が主演になった若い頃の映画を観て、今の自分を鼓舞

して、あの演技を越えたいと思っているが、なかなか越えることはできない」と。ただ、私には、人情味あふれる東京下町の足袋屋のお母さんを演じる吉永さんの姿は、とても新鮮で羨ましいほどに明るく輝いて見えました。

そしてまた、若い頃、研究授業後に校長先生に言われたことを思い出しました。「君はこれから長い教師人生を送ると思うが、今日を越える授業は、そうはできないだろう」と。褒め言葉のような不思議な言葉でした。私は、そんなはずはないと思いました。経験を重ねれば、今日のような拙い授業ではなく、もっともったい授業ができるはずだと。担任生活を終える頃に、あのときの言葉は、本当だったと思いました。あのときのように若いエネルギーにあふれ、澄み切ったように純粋な授業は、あれ以来、できなかったのかもしれないと。吉永さんの演技と自分の授業を比べるのは失礼極まりありませんが、あのときの校長先生には、吉永さんと同じものが見えていたのかもしれない。

しかし、過去の自分を越えようとしている吉永さんの輝くような演技を観ながら、新たな思いも湧いてきました。今、自分に与えられた役割に全身全霊をこめ、目の前の子どもたちの現在を見つめ、過去と未来を想像しながら、純粋な心で臨むことが、あのときの自分に近づくことだと。そんな思いを強くして、映画館を後にしました。